

論文を書き上げるために必要な持ちもの

平成22年3月修了生 西村 圭一

はじめに

博士課程在籍当時、この合同ゼミナールに参加し、先輩方の「博士論文執筆経験談」を拝聴し、勇気づけられたことを思い出します。今回は、在籍時の3年間に、自分が何に悩み、それをどのように乗り越えたかを振り返り、博士課程の「一先輩」として、をお話したいと思います。

博士論文を書き上げるために必要な持ちもの

(1) 本課程で書く「博士論文」のイメージを持ちましょう

私は、博士課程に入学したものの、一体、どんな論文をかけば「博士論文」になるのかのイメージが持てずにいました。「博士論文」というものの漠然とした捉えです。

現職で本課程に入学した私は、少なからず、査読論文を持っていましたが、それらの大半が実践研究論文でした。それらと「博士論文」を結びつけることができていませんでした。論文博士の先生方の学位論文を読むたびに、混沌の度合いは増し、右往左往しているだけだったように思います。

所属講座の先生方の指導や合同ゼミナールでの交流を通して、「こういう論文を書けばいいのだ」と思えるようになって、ようやく、博士論文を書く目的が明確化し、それが、「何としても論文を書き上げる」という意思につながりました。

研究の目的や方法を明確化し入学しているわけですが、それとは別に、早い段階で、自らがどのような論文をかけばよいのか、漠然としたイメージをもつことが大切だと感じています。

(2) 研究「原点」を持ちましょう

研究の「原点」を持つことが大事だと思います。私は、研究に行き詰まったとき、「自分は何のために論文を書こうとしているのか」を確かめる、つまり、原点に立ち返ることで、自分を奮い立たせるようにしました。具体的には、新たな教材を開発し指導を工夫すれば、日本の中学生や高校生の数学的資質や能力はもっともっと伸びるのだ、それをせずに、学力低下や数学離れというフレーズのもと従来型の教育を強化し続けては子どもがかわいそうだ、というものでした。

「学校教育学研究科」に在籍しているのですから、やはり、子どもたちの笑顔につながるような「原点」を持ちたいものです。

(3) 「広い視野」を持ちましょう

一人で研究をしているとどうしても視野が狭くなりがちです。それでは新たな発想が生まれません。私は、他教科の研究に触れてみたり、ESDやリテラシーといった現代的な教育課題の中に、自分の研究を位置づけてみたりすることで、多くの示唆が得られました。

(4) 「材料」を持ちましょう

バーベキューに例えてみましょう。先行研究のレビューや欧文論文の邦訳、授業や調査の記録、教材研究等を電子データ化することは、食材をそろえることにあたります。それらをもとに、学会発表をしたり、学会誌に投稿したりすることは、下ごしらえをすることになるのではないのでしょうか。このことをこまめにやっていたことが、実際に博士論文を執筆し始めたときに効きました。

(5) 「ストーリー」を持ちましょう

一方、食材だけがそろっても、串や鉄板がなければバーベキューはできないように、よい教材やうまくいった授業があっても、それを束ねることができないと先へは進みません。誤解を恐れずに言えば、串や鉄板にあたるものが、論文の「ストーリー」、すなわち章構成だと思います。人を説得できるような「ストーリー」ができて始めて「食材」が活かされます。

(6) 「励ましてくれる人」を持ちましょう

かなり大きな要素のように感じています。

おわりに

論文の目的を高く掲げ、その中で、いまの自分の研究の「位置」を明確化することで「落ち着く」ように思います。

私自身、これからも研究のための研究にならないように、目的を高く掲げ、研究を進めていきたいと考えています。